予知の聖女は騎士と共にフラグを叩き折る



### П ローグ

窓の向こうの中庭には、 白薔薇が艶やかに咲き誇っていた。

遠くには緑の回廊や煌めく泉が見え、その美麗さに目を奪われる。 そんな瀟洒な景色に臨む、

王

宮の廊下。 前を歩く長身の青年が、ふと足を止めて私を振り返った。

-チハヤ様。どうか、 俺の傍から離れられませんよう」

う、 低く落ち着いた美声で囁かれ、慌てて頷く。答えつつ視線をやや逸らしたのは、昨日見たある光 うん。どこに危険があるかわからないし、できるだけ離れないようにするね」

景のせいで、彼と顔を合わせるのがとても気まずいからだ。

平凡な女子大生だったはずなのに、ある日この異世界にトリップし、 聖女として遇されている私。

に周囲を見ているため、 闇夜のような黒髪に、強い意志の光を湛えた翡翠の瞳。詰襟の黒い騎士服を着た彼は、そんな私の護衛騎士に選ばれたのが彼、ヴァルターだ。 私の様子にもすぐ気づいたらしい。 常に冷静

か……なにか、 「そう仰りながら、徐々に離れていかれているようにお見受けしますが。 気になられることでも?」

様子がおかしいという

一別に そういうれけじゃ……」

貴女なら、先程の言葉にも元気よく言い返してこられるものを」 「ならばもう少し距離を詰めるか、いつものように思いを口になさって頂きたい。そもそも普段の

6

どう答えようか迷っていると、ヴァルターが怪訝そうに顔を覗きこんでくる。 なぜなら私は、 だからこそ、ばれないようにしようとするあまり、挙動不審になってしまうのだ。 彼に言えばきっと、ありえないと眉を顰められるか、 うう……さくっと言えるならそうしているが、生憎、それができない理由があるのだ。 いつもと違う私を訝しく感じているのか、彼らしい率直な言葉が返ってくる この世界で得た能力により昨日、彼と自分に関する未来を視たから。 一笑に付されるだろう未来。

りり 「チハヤ様? やはり貴女は、昨日からどこか様子が……」

凛々しい美貌が間近に迫り、胸が落ち着かなくなった私は、。。。 思わず距離を取る。

|あの……本当になんでもないの。そ、そうだ!| ここはもう安全だし、先に部屋に戻ってるね|

そしてそのまま、慌てて身を翻す。

わされるのは皮肉や軽口ばかりで、 言い逃れられそうにないから。だてに、何度も彼と口喧嘩はしていないのだ。 実際、王宮の二階であるここは護衛不要の区域だし、なによりこれ以上彼の追及を受けていたら、 (面の印象が互いによくなかったせいもあり、出会って二週間経った今でも、 私とヴァルターは聖女と護衛だが、その立場がなければ、 甘い雰囲気など一度も漂ったことがない。 喧嘩友達のような間 私たちの間でか

かけない存在だろう。だというのに。 そもそも国一番の騎士であり、凛とした美貌を持つ彼からすれば、私なんて異性として歯牙にも

-もう、なんだって私は、彼と結婚する未来なんて視ちゃったのよ……!?

いくら予知で視たとはいえ、彼が私の未来の夫になるとは、 廊下を駆けながら、自分の能力に頭を抱えてしまう。 やはりどう考えても信じられない。

あれはなにかの間違いだと言われた方が、 そんな風に、私が思わぬ事態に頭を悩ませることになったきっかけは、遡ること二週間前 あの雨の日の夕方が、 すべての始まりだったのである。 まだすんなり受け止められる。

### \* \* \* \* \*

「あっ、雨……」

大学からの帰り道。私 遠野千早は、頬に当たった雫に顔を上げた。

り始めている。 見れば、さっきまで晴れていた空はいつの間にか灰色の雲に覆われていて、 ぽつぽつと小雨が降

た様子だ。近くの軒下に向かって急いで駆けていく会社員や、時刻は午後四時頃。目の前の通りは商店街近くのため人が名 こめる店員の姿が視界に入ってくる。 目の前の通りは商店街近くのため人が多く、そこにいる誰もが急な雨に驚い 店先に並べた商品を慌てて奥に引っ

天気予報でも終日晴れマーク。 朝のニュースで今日は降水確率ゼロパーセントと予報され、 その状態で雨が降れば慌てもするだろう。 昼にスマホで見た

8

けれど私は少しも焦らない。なぜなら

「やった! やっぱり、 傘を持ってきて正解

の空の下、 な気がして、鞄に入れてきていたのだ。予想が当たったことに胸を弾ませつつ、 思わず笑顔になって、肩にかけたトートバッグから折り畳み傘を取り出す。 赤いそれは鮮やかに目に映る。 今日は雨が降りそう 傘を差した。

想ばかりだけど、当たると嬉しくなるものだ。 高校時代、テストがある予感がして登校すると、抜き打ちテストがあったり。 と感じて選んだ商品が翌日に雑誌で紹介され、品切れ状態が続いたり。どれもささやかな予 私は昔から勘がいいのか、こうなるかも……と感じた予想がよく当たる子供だった。 今買った方が いいい

「もしおじいちゃんがここにいたら、『また当たったか、やるなぁ』 幼い頃を思い出し、ふふっと目を細める。 って褒めてくれたかも

作ってくれたこともあった。 今は亡き祖父はなんでも楽しもうとする人で、 私が小学生の頃には、 お手製のスタンプカードを

か千早の好きな物でも食べに行こうな』 『予想が当たったら、 しわくちゃの顔で笑って、私の髪をくしゃくしゃと撫でて。 じいちゃんがスタンプを一個押してやろう。そうして全部埋まったら、

私がなにか達成した時は全力で褒め、駄目なことをした時は深く論し……いつだって親身に寄り い頃に私の両親が他界して以来、男手ひとつで私を育ててくれた祖父。

添ってくれる人だった。 そんな幼い頃、 私はこうした勘が当たるのが嫌で仕方ない時期があった。なぜなら、 番勘が働

せも一切なく、小学生の私がそれを知ったのは、すべてが終わった後。 いてほしかったこと 何の前触れもなく彼らは飛行機事故に遭い、 両親の事故については、なにひとつ予想できなかったから。 帰らぬ人になってしまったのだ。 虫の

それから呆然としているうちに、祖父の家に引き取られた。

言った。夏の夕暮れ時で、 その日、 悲しさとやりきれなさから塞ぎこみ、 遠くで蝉がじわじわと鳴いていた覚えがある。 縁側でぎゅっと膝を抱えていた私に、 祖父はこう

『千早はよく勘が当たるなぁ。本当に大したもんだ』

止め、二人とも無事だったかもしれない。そう思うと、どうしてもやりきれなかったのだ。 もしいつもみたいに私のささやかな勘が働いていたら、 俯いた私に、隣に座る祖父は空を見上げてから頷いた。 ぜんぜん役に立たないよ。……大事な時に少しも当たらないんだもん 今日は空港に行かないで、と両親を引き

がそれでも、 『そうだなぁ。本当に必要だった時に自分の力が発揮できないのは、確かに悔しいもんだ。 千早の勘のよさが、 いつかなにかに役立つ日だってくるかもしれんよ』 ....だ

『……いつかって、

いつ?』

にじいちゃんは今も、千早の勘がいいことが有難いなぁと思ってるよ』 『さて……それはじいちゃんにもわからんが。そのうちかもしれんし、 ずっと先かもしれ それ

『ありがたい?』

不思議に思って見上げた私に、 目を細めた祖父は穏やかに 頷 いて言 ら た。

から、 さで危険を逃れて無事でいてくれるんじゃないかと思うと、なんとなく……こうな、 『たとえばだが、じいちゃんはどうしたって、ずっとは千早の傍にいられんだろう。 それはどうしようもないことだ。 -けど、じいちゃんがいなくなった後も、 年寄りなんだ ほっとするん お前が勘のよ

祖父はそう言って、 自分の心臓の前でぎゅっと片手を握ってみせた。

『ほっと、するの……?』

りでもあるし、じいちゃんのお守りにもなるんだ』 だから、今だってその特技は決して無駄なんかじゃない。 『ああ。じいちゃんがいなくなっても、 お前を守るなにかが傍にあると思えば、 考えようによっちゃ、 それは千早のお守 そりゃあ安心する。

器用な言葉と共に、 そう締め括り、 彼は私の背をそっと優しく叩いた。 私を慰めてくれたしわしわの手。 きっと誰より悲しかったはずなの 不

らないよう考えて、 私が自分を責め続けないよう、 言葉にしてくれたのだろう。 そして、 い つか来る彼との別れの日に私が自暴自棄にな

私はくよくよ悩むことをやめた。確かに、 彼の言う通りだと思ったから。

だって、どんなに悲しくても、過ぎてしまった過去はもう変えられないのだ。それに前を向い あの時こうしていれば結果は違ったのかも、なんて悔やんでいても仕方ない。 7

ささやかな特技でも、なにかに役立てられる時が来るかもしれない。

そう思い直して日々を過ごすことにしたのだ。

歩いていれば、

ただ、そんな風に私を元気づけてくれた祖父も、長年の持病との闘いの末、 三年前に亡くなって

中にしっかり根付いていたから。 んでいないで、どんな時も顔を上げて日々を過ごす。 しまった。 もちろん悲しく辛かったけれど、私の胸に残ったのはそれだけでは決してなかった。 病床でも、最後まで私の心配ばかりしていたっけ。 祖父が教えてくれた大事な思いが、 過去を悔や 私の

い日々を送っていても、不思議とやさぐれたり悲観したりする気持ちは起きなかった。 祖父を亡くして天涯孤独になった今、大学生活の傍らアルバイトの掛け持ちをする忙し

送れるはず。そう思えば、ふつふつとやる気が漲ってさえくる。 それに今の私は、 大学三年生。あと一年間この生活を乗りきれば、 無事就職して安定した生活を

「よし! 今日も頑張ろうっと」

インドウをふと見れば、そこにはやる気に目を輝かせる私の姿が映っていた。 バイトに向かうため、 雨の降る道を歩き出す。 横にあるパ を 0 シ  $\exists$ ゥ

ピースに赤紫のカーディガンを重ねた姿で、 胸下まである長い髪は生まれつき赤みを帯びた茶色で、 初秋の気候にちょうどよい組み合わせだ。 目もやや赤茶っぽい。 ・ワン

一目惚れして購入した服だけれど、 やっぱり素敵で、 買ってよかったなと思う。

12

ふとそこで、さっきより雨足が強くなっていることに気づいた。

「なんだか風も強くなってきた感じね……早く行かなきゃ」

バイトのシフトを入れている中、 り畳み傘があるとはいえ覆う面積が小さいので、 濡れて風邪なんて引いてはいられない。 注意しても肘などが濡れてしまうのだ。

黒い地面に傍の木々が映りこんでいて、 そのまま早足で通りを抜け、 公園脇の道に差しかかった。そこはひっそりと人気がなく、 どこか神秘的な風景に見える。

それはまるで、豪華絢爛な部屋のような…… 水たまりを避けつつ歩いていくと、ひときわ大きい水面に、なにかがちらりと映った気がした。

やや寂れた遊具だけ。 そんなもの が周囲にあるはずもない。 あるのは鬱蒼とした緑や、 公園に置かれてい

なにか見えた気がしたけど、気のせいだったかな?

するが、信じられないことに足はそのまま、 崩して、水たまりへ足を踏み入れてしまう。やだ、靴が濡れる……! そう首を傾げ、 さらに足を進めた時。 ふいに吹いた風に傘が攫われかけ、 ずぶずぶと沈みこんでいく。 と焦って足を引き抜こうと 「わっ」 とバランスを

― えっ

ていた。ただの水たまりだったはずの、 ありえない状況に目を瞠 った、 次の瞬間。 黒い 水面の中に。 どぼんと大きな水音がして、 私は全身、 水の中

まるで海中を漂っているかのようだ。 そして、 落ちた先にはさらに信じられない光景が待っていた。 見渡す限り藍色の水が満ちていて、

そんな中を私はひとりゆらゆらと漂いつつも、 深い青色は揺らめきながらどこまでも続き、 すぐ傍では小さな気泡がいくつも上へのぼっている 徐々に下へ沈んでいく。

「なにこれ……もしかして、夢でも見てる?」

呆然とした呟きが口から漏れ、えっ、喋れる? とまた驚いた。

ゆっくりと沈んでいくことしかできない。 よく見れば、ぼんやりとした光の膜が私の身体を包んでいて、そのお陰で呼吸ができるらしい。 だからといって自由に動けるわけではなく、 なにかに引っ張られるみたいに、 光の膜ごと

ていることに気づいた。近づくほど、それは眩いものへ変わっていく。 どれくらい沈んだのだろう。やがて遥か下方の空間に切れ目が見え、 そこからかすかな光が漏 れ

さっき水たまりの中に見えた豪奢な部屋を思い出した。 呼ばれるように、

その切れ目へ吸い寄せられていく私は、とにかく焦る。

わっ、待って待って。どこに行くの。 光の輝きは目を焼き尽くさんばかりに眩くなる。 というか、眩しい……!!

もはや目を開けていられなくなった私は身を硬くし、 ぎゅっと瞼を閉じたのだった。

## 奇跡の聖女

14

徐々に目が慣れ、 い光に視界を奪われていたのは、 おそるおそる瞼を開く。 とても長い時間のようでもあり、 するとそこには 瞬のようでもあった。

「えっ? **ここ……」** 

全に地上の、それもお城の大広間らしき風景に、ぽかんとする。 目の前には、いつの間にか荘厳な部屋が広がっていた。 水中にいた時の名残りは微塵もなく、

た深紅の絨毯は繊細な模様が織りこまれ、気品と重厚さを感じさせた。 天井には豪奢な燭台が輝き、 壁には美しい絵画や金縁の鏡がいくつも飾られている。 床に敷かれ

金の透かし模様に宝石が象嵌された意匠は芸術的で、まるで玉座だ。 部屋の奥には数段高い四角いスペースがあり、そこにひときわ立派な肘掛け椅子が置かれている。

その椅子の前には、まさに王様といった姿の金髪男性が佇み、こちらを驚きの顔で見上げていた。 三十代半ばの威厳あるその男性の周囲では、 家臣らしき人々が戸惑った様子でざわめいている。

「あの女性はまさか あのような場所に……!」 ?

なんか私、 注目されてる?

れた状態で、天井付近の宙にふわふわと浮いていたのだ。 そこで自分が空中に浮かんでいることに気づき、ぎょっとする。なんと私は、 あの光の膜に包ま

広い部屋にいる数十人もの人々は、そんな私を驚愕の顔で見つめていた。

いるだけでもだいぶ異常なのに、私はここでひとり、異質な見た目だったから。 気持ちはわかる。私だって立場が逆なら、きっと唖然として見上げていただろう。 それ 宙 に

この場の人々は皆、金髪や栗色の髪で白色人種系の外見の上、 元れば、金髪男性の前には、腰に剣を偏いた、騎士らしき凛々しい黒髪の青年が跪い彫りの浅い顔立ちで現代日本の服を着た私はひたすら場違いでしかない。 中世西洋風の格好なのだ。 そんな

い服を着た優美な人々もいて、その誰もがとても洗練されており、とにかく目の保養になる。 「すごい……なにこれ」 目を見開いた彼の後ろにも、 似た服装の屈強な男性たちがずらりと並んでいた。壁際には裾の長 てい る

まるでおとぎ話か、 ファンタジーの世界にでも紛れこんだ気分だ。

に薄くなってきたから。光が薄まるごとに、身体が宙でぐらぐらと安定しなくなってくる。 だがすぐに、ドキドキしている場合じゃない、とはっとする。なぜなら私の身体を包む光が徐々 あれ? これってだいぶまずい感じじゃない?

冷や汗を掻いた瞬間、光が完全に消え、

私はたちまち床に向かって落ちてしまう。

ああ、 やっぱり

もはや対処のしようもなく、 ぎゅっと目を瞑り、 次にくる衝撃に備えようとする。

だが、床にぶつかる痛みは、 なぜかいつまで経ってもやってこなかった。

それどころか、 しっかりとしたなにかに包みこまれているような

「あれ、痛くない……?」

おそるおそる瞼を開ければ、 黒髪の青年の整った顔がそこにあった。どうやらさっきまで金髪男

性の前に跪いていた彼が駆け寄り、抱き留めてくれたらしい。

見えるけれど、程よく筋肉がついているのがわかった。美丈夫という言葉がしっくりくる、 強い意志を湛えた翡翠の瞳が目を惹きつける。黒い騎士服を着た身体はすらりとして

前半ほどの青年だ。

すごく格好いい人……と、思わず見惚れてしまう。誰もが驚きに固まっていた中、

寄って抱き留めたところを見るに、きっと瞬発力や身体能力がとても高いのだろう。

の、ありがとうございます」

――いや、怪我がないならよかった」

動揺しつつお礼を言えば、 彼はよく通る低い声で答える。そして私を丁重に地面に下ろし、

の壮年男性の前に戻ってすっと跪いた。

陛下。お許しを得ぬまま御前を離れ、大変失礼致しました」

その娘に傷を負わせぬ素早い対処、誠に見事であった。ヴァルターよ」

呆然としていた金髪の男性は、はっとして答えると、青年 深く感じ入った様子で唸った。 ヴァルターさんから私に視線を



緩く波打つ長い金髪に、

ばかりの面持ちで私をまじまじと見つめている。 「それにしても、 よもや奇跡の聖女が我が代で現れるとは……それも戦の勝利を祝う場とは、 なん

彼らの演劇みたいに時代がかった台詞やその内容に、戸惑ってしまう。 聖女って一体……? というか、 陛下と呼ばれたってことは、 この人はやっぱり王様なの

屋に移動していたなんて、 そもそも、 水たまりの中に落ちて、気づけば見知らぬ場所 まるで異世界トリップだ。 -それも中世西洋の王宮みたい

現実的だもの。 て……ううん、 私の好きなファンタジー小説ではよくある展開だけれども、 やっぱりないない。さすがに夢を見すぎだわ。 だってそんなの、 それが自分の身に実際に起こるなん どう考えたって非

かっているのだろう。 恐らくこれは映画の撮影かなにかで、 居並ぶ人々が美形揃いなのも、 偶然紛れこんだ私をお茶目な外国人俳優さんたちがから そう思えば納得がいく

やや本格的すぎる気はするけれど――

考えこむ私に、 金髪男性が合点のいった様子で、ああ、 と頷 いた。

む……まずは名乗ろう。 天の霹靂のようなもの。 「戸惑っておるか……それも仕方ないことよな。 余はこのファレン国が王、 聖女は己が意思ではなく、 遠い世界から来たそなたに 天の意志によって呼ばれるものと聞くゆえ。 モーゼス。そなたの名はなんと申す」 してみれば、 これは青

ないが、私もバイトの時間が迫っていてまずい状況なのだ。 あくまで演技を続行する彼に、 私は戸惑いつつ答える。せっかく続けてくれているところ申し訳

こから帰ったらい んでした。私、アルバイトに行く途中なので、すぐにここから出ていきますね。 「私は遠野千早という名前で……いえ、それより、なんだか撮影のお邪魔をしたみたいですみませ いんでしょう?」 ごめんなさい、

人が多くて出口が見えなかったため尋ねると、 彼は神妙な顔で首を横に振 った

「それは、 今すぐ元いた世界に戻りたいということか? 残念だが、それは無理というものだ\_

「無理?」

目を瞬いた私に、彼――モーゼスさんははっきりと頷く。

光に包まれてふいに消え去ったと聞く。 ることは恐らく不可能であろうよ」 「そうよ。 伝承では、そなたら聖女は人智を超えた光に包まれた状態でふいに現れ、 であれば、その帰還の光が現れぬ限り、 そなたが故郷へ戻 去る時もまた

あの、ちょっと待ってください! さっきから本当になんの話を……」

帰還の光とか、 どこまでも真剣な彼の表情を見ていると、 からかうにしてもやけに設定が細かすぎるというか、 次第に不安になってくる。 堂に入りすぎだ。 演技という言葉で

済ませるには、なんだか出来すぎな気がして――

ふと横を見れば、 いの色など微塵もない表情だ。 さっき私を抱き留めたヴァルターさんも真剣な眼差しで私たちを見守っている。

男性たちも、神妙な、あるいは感激に打ち震えているかのような表情でこちらを見守っている。 たかも本当に、聖女の降臨を目にしたかのように。 いや、彼だけじゃない。 後ろにずらりと控える騎士らしき屈強な男性たちや、 文官らしき優美な

見たことがない、 らは陽射しが差しこみ、向かいの壁に飾られた絵画を照らしていた。 土や花、それに嗅いだことのない異国の香りが、風に乗ってふわりと鼻へ運ばれてくる。 そんな彼らの後ろにある半円アーチ型の大きな窓から、 どこか不思議な神々らしき存在の絵だ。 かすかな風がそよ 日本どころか、 いでいい 海外でも 窓辺か

それらを目にして、次第にぼんやりと理解し始める。

なんかここ、やっぱり違う、日本じゃない。というか、 外国ですらないっぽい、

まさか本当に、 異世界だったりするの……?」

気づけば呆然と呟いていた。

たってそう簡単にできるはずもない。 水たまりの中に落ち、そこから別の場所へ瞬く間に移動するなんて、 でも、よくよく考えれば、ここに来た経緯からしてありえないことの連続だったのだ。 どんな壮大なセットを作っ

そう、目の前の彼が言うように、人智の及ばない力でも働かない限りきっとできないことなのだ。

つまり、ここは地球ではない、どこか別の世界。

呆然とする私の前に、王の後ろから文官らしき青年がすっと進み出てくる。 さらりとした長い銀髪に淡い菫色の瞳の美青年で、儚げな風貌はまるで雪の精霊のよう。

その容姿に似合った裾長の白い服を纏った彼は、丁重に王へ話しかけた。

ら、私の方から続きをご説明させて頂いてもよろしいでしょうか?」 「陛下。お話し中、誠に失礼致します。 聖女様は先程からひどく困惑されているご様子。

「ノアか……。確かに聖女の歴史に詳しいそなたならば適任であろうな。ふむ……では任せよう」

「有難き幸せにございます」

彼の着ている白い衣装がさらりと衣擦れの音を立て、それがやけに耳に残った優雅に頭を垂れたノアさんは、私に向き直ると穏やかに微笑む。

を重ねる文官、ノアと申します。 「お初にお目にかかります、聖女様。私は、 恐れながら、 貴女と同様に異邦の地から来られた女性につい 初めにご説明差し上げたいのは、 ここは貴女がいら て研究

した世界ではないということです」

「私のいた、世界じゃない……?」

先程自分でも思ったこととはいえ、 改めて言葉にされるとやはり衝撃が大きい

それ以上の言葉が出てこない私に、ノアさんはどこか同情するような眼差しで頷く。

それを我々がお迎えしてきた歴史があるのです」 しかしながらこれは、 「別の世界に忽然と移動するなど、夢まぼろしがごときこと。 我が国で数百年に一度、実際に起こってきた事実。 戸惑われるのも道理にございます。 異能を持つ聖女様が現れ、

「異能を持つ聖女……」

さっきもモーゼスさん 国王からそんな話を聞いたけれど、 まさか彼らは、 本当に私が聖女だ

とでも言うのだろうか。戸惑って見つめ返すと、 肯定が返ってくる。

びしております。 「左様でございます。奇跡の力で国に恩恵をお与えくださるため、我々はその尊き女性をそうお呼 これまで現れた聖女様も皆、人智を超えたお力をお持ちでしたので……」

えても私はそんな大層な人間じゃないです。もし……もし仮に、私が別世界からここに来たのだと しても、きっとただそれだけで。だって私、本当にただの平凡な大学生ですから……!」 「人智を超えた力って……いえあの、 違います! さっきから誤解があるみたいですけど、どう考

**慌てて返すが、ノアさんは落ち着いた声で言う。** 

なくともここでは違うはず。 んでしたが、この地に来たことで見事、 「貴女が平凡であるなど、そのようなはずはございません。元の世界ではそうだったとしても、 なぜなら歴代の聖女様も、元はなんのお力もお持ちではありませ その異能を発揮されたのですから」

「この世界に来てから?」

つまり今まで現れた聖女も、元々はごく普通の人だったってこと?

思わぬ発言にぽかんとする私に、ノアさんははっきりと頷く。

われます。あれと同様の光に包まれたことで歴代の聖女様も、元々持っていらっしゃった特技や能 「ええ。先程、貴女が包まれていた光の膜。あれこそが天の祝福であり、異能を授かった証拠と思 異能と呼べるほど強大な力に進化したと伝承に残っておりますので」

「特技が強大な力に進化するって、まさかそんなこと……」

私の困惑は最高潮に達していた。

いってこと? ええと……つまり、ライトノベルとかでよく見るチート能力を、 今の私も持っているかもしれな

しかも、どうやらそれは、 自分の元々持っていた特技が進化したものらし

そんな摩訶不思議なこと、本当にあるのだろうか。

戸惑いつつ自分の身体を見下ろすが、特に変化があった様子はない

だってすぐには思い浮かばない、平凡人間だ。 というか、 そもそも私は勉強の成績も運動神経も平均レベル。 悲しい かな、

だから強い力に進化するような特技自体、特にないと思うんだけど……

囲気だ。なんの力もないと証明するにも、その証拠を見せないことには始まらないだろう。 ノアさんたちは期待の眼差しで見つめているし、なにかやらねば納得してもらえない雰

でも、どうしたらいいんだろう……とりあえず、念じてみたらいいのかな?

ためらいながら、右手に視線を落とす。

ありえないとは思うけど、もしかしたら奇跡が起こって魔法が使えるようになっているかもしれ なにも起こらなければ起こらないで、ほら、やっぱり言った通りでしょ? 女は度胸だ。 気持ちを奮い立たせ、 私は掌を見つめて強く念じる。 って胸を張れる。

火でも水でもなんでもいいから、魔法よ出てこい……!

だがしばらく待っても、手からはなにも出てこない。

ならば念動力でも発動しないかと、 さらに念じたが、 やはりうんともすんとも言わなかった。

躍的に上がった感じもない。大勢に神妙な顔で見守られる中、 思いきってその場でえいっとジャンプしても、 次第に恥ずかしくなってくる。なに、この羞恥プレイ。 いつもと同じ高さまでしか飛べず、 私が挙動不審な動きをしただけにな 身体能力が飛

24

「ごめんなさい。 やっぱり私、これといってなんの力もないみたいで……」

私を聖女だと宣言した国王にも、 申し訳ない気持ちになってくる。

そうして恥ずかしさに居た堪れなくなりながら、国王へ視線を向けた時。

私の脳裏を、 様々な風景や音が、ぶわっと光のように駆け抜けていった。

まるで洪水みたいに、溢れる光と音。

「え――?」

青空の下、 木々や草が風に揺れる広い草原。 悠々と羽ばたく白や黒、 茶色の鳥たちの鳴き声。

立派な外套を纏った金髪男性の、堂々とした立ち姿。

それらの風景や音が収束し、ひとつのまとまった映像として頭の中に形作られていく。

音が合体し、動画が自動生成された感じだ。

――それは、ここではない、どこかの草原の風景。

に乗せた人々がいる様子から、どうも鷹狩り中の光景のようだ。 の前にいる金髪の国王が、 真っ白い鷹を右拳に乗せて草原に佇んでいる。 彼の後ろにも鷹を手

どうやら国王の鷹が大きな獲物を捕まえてきたらしく、 ある鷹が空へ飛び立ったかと思うと、すぐに別の一羽が獲物を咥えて地上 周囲の人々から喝采やどよめきが起こる。 へ舞い戻ってくる。

外套姿の国王は、白鷹を右手に乗せたまま、 彼らに威厳のある微笑を返していた。

渋い彼によく似合う姿だけれど、 なぜ突然、 こんな風景が思い浮かんだんだろう。

「うーん……なんで、鷹狩り?」

「今そなた、なんと申した?」

はっと真剣な表情になって尋ねてきた国王に、 私は首を捻りながら答える。

「あの、 なぜか今、 貴方が鷹狩りをしている光景がふと目に浮かんだんです。 綺麗な白い鷹を手に

乗せて、草原で鷹狩りしている様子で」

「白い鷹を……?」

「はい。あっ、あと、 とても立派な外套を羽織っていました。 背中に 獅に 子が刺繍されてい て、 それ

が金髪と一緒に風になびいていて……」

思い返しつつ口にした私に、国王が低く唸る。

「そうか……余が獅子の外套をな」

「ええと、それがどうかしましたか?」

もしかして変なことを言ったかと不安になり尋ねれば、 彼は深い感嘆の籠った息を吐いた。 そし

て、信じられないとばかりに小さく首を横に振る。

「いやはや……これは驚いた。なんとそなたは、 予知の聖女であったか……

「予知の聖女?」

きょとんとしていると、彼は熱の籠った様子で頷く。

未来を予知せし聖女。まさか、そのような珍しき異能を持つ者だったとは……」

26

「えつ? いえあの、今のは、ただちょっと頭に浮かんだだけで」

めてそれを披露すべく、現在、秘密裏に飼育しておる最中なのだからな」 まで幾度もしてきたが、 「なに、そう慌てるでない。それこそが予知だと言うておるのだ。 そこに白鷹を連れていったことなど一度もない。 余は鷹狩 なにしろ次の鷹狩りで初 りが趣味でこれ

「秘密裏に……」

目を見開く私に、彼はしみじみと続ける。

おらぬゆえ。それにそなた、余が獅子の刺繍された外套を羽織っていたと申したな?「だからこそ、余と飼育に関わる者以外、その鷹のことは知り得るはずもないのだ。

「は、はい!」

入っていないはず」 「それもまた、本来ならばそなたが知り得るはずもない情報よ。 仕立て屋が作っている最中でな。恐らく布地の縫製までは進んでおろうが、 その外套は、 次の鷹狩りで着るた 刺繍はまだ一針も

「刺繍もまだって。じゃあ、私が見たあの映像は----

なのだ。さらに言えば、 「うむ。 それをそなたは見たのだ。 ゆえに、余がその意匠を指示した侍従や仕立て屋以外の 刺繍が仕上がった状態など、仕立て屋本人にさえまだ見えてこぬ状態だろ -すなわち、 そなたは未来を垣間見たということよ」 人間は、 知り得るはずもないこと

「私が、未来を……?」

いた特技が、天の祝福によって強大な異能に変わるのだと、彼は言っていた。 信じられない思いで絶句するが、そこでノアさんの言葉がふと脳裏に蘇る。 聖女の元々持って

それは、 私には特技なんてないと思っていたけれど、 ささやかながら度々当たっていた、勘や予想。 改めて考えるとひとつだけ思い浮かぶものがある。

¯もしかして、これが予知能力に進化しちゃったわけ……?」

言いながら、頬が引きつってしまう。

時々小さな勘が当たるのと、未来が映像として見えるのとでは大違いだ。というか、 さっきまで

絶対に自分は聖女じゃないと思っていただけに、予想外の結果に呆然とする。

そんな私の前で、 国王が周囲に視線を向け、声を張り上げて宣言した。

彼の娘が見せし予知能力は、まさに聖女にしか使えぬ異能。

ならばこれ

「皆の者、

見たであろう。

より、この者を我が王宮で手厚く保護しようぞ」

の涙を拭ったりしている。 その言葉に「おお……!」と感嘆する声や、 騎士らしき男たちは精悍な顔に感動の色を浮かべ、文官らしき人々は天に祈りを捧げたり、 国王はぐるりと騎士たちを見渡し、最後にあの黒髪の美青年 なんだか、どんどん抜き差しならない状況になっているような。 歓声が上がる。 ヴァルターさんに 喜び

視線をぴたりと止めた。そして、 「我が国で最も名高き騎士、ヴァルターよ。今この時より、 突然の指名に目を瞠ったヴァルターさんは、 朗々と響く声で告げる。 だがすぐに、 そなたに聖女の護衛を命じる」 はっと応えた。

27

げる眼差しは強かった。 そして彼は一歩進み出ると、 私の前にすっと跪く。男らしいやや硬い声は凛と響き、 私を見上

28

騎士の姿絵のよう。私は思わず目を奪われながらも、困惑に立ち尽くしていた。 「ご命令とあらば そのまま流れるように私の手の甲に口付けた彼は、 -尊き方。このヴァルター、必ずや何者からも貴女をお守りしましょう」 気品と精悍さを併せ持つ美貌もあり、 まるで

深紅の絨毯が敷かれた荘厳な大広間は今や、異様な熱気に包まれていた。 その間も周囲からは盛大な歓声が絶えず湧き、国王や聖女を称える声が重なって聞こえてくる。

けど。それに、勘のよさがいつかなにかで役立てばいいなとは、 どうしよう、 いきなり護衛の騎士まで決まってしまった。 常々思っていたけど いや、 守ってもらえるのは有難

それでもやはり、 だらだらと汗を流しつつ思ってしまう。

おじいちゃん、まさかこんな状況で役立つなんて思ってもみなかったよ。

というか、聖女なんて、 お願いだから誰か嘘だと言って……

私の心の叫びは、 いつまでも胸の中で大きくこだましていたのだった。

**※** \* \*

-二時間後。

怒涛の流れで聖女認定された私は、 大広間から十分ほど歩いた先にある瀟洒な部屋にいた。

で使うにはだいぶ広い居間と、奥にあるこれまた広い寝室の二間続きだ。 案内してくれた侍従の話によると、賓客用の部屋を私用により美しく整えたのだそうで、ひとり

ていた。壁際には絵画や飾り棚が並び、中央にはテーブルと長椅子が置かれている。 居間は天井や壁が淡い薔薇色で、布製のファブリック類は濃い薔薇色など美しい色彩で統

私はその長椅子に座り、ぐったりと背から凭れた。

私に予知能力があるなんて……嘘みたい」

にわかには信じられないが、国王がああ言う以上、きっと事実なのだろう。

格好はさせられぬと、すぐに仕立て屋が呼ばれ採寸までされた。 介され、その後、 ちなみに私が疲れているのは、ここへ案内されるや否や、ずらりと並んだお付きの侍女たちを紹 聖女の衣装に着替えさせられたからだ。しかも聖女としてもてなす以上、下手な

わされた裾長のデザインで、派手すぎず清楚で可愛い。 正式な衣装が仕上がるまでの仮の服だが、 もちろん採寸してすぐ服はできないので、 今着ているのは、 それでも綺麗で上等だ。 上等だ。 白地に薔薇色の生地が組み合仕立て屋が持ってきた既製服。

のでとお願いして、 実を言えば、金糸銀糸を使ったもっと豪奢な衣装をすすめられたのだけど、できるだけ地味なも なんとかこれで妥協してもらったのだ。

「あんまり仰々しい格好なんて私に似合わないし、なにより落ち着かないもんね」

呟いて苦笑する。なにしろ普段の私は、 セントで気軽に洗える服の方がずっと落ち着くのだ。 アルバイトに明け暮れる大学生。繊細な絹の服より、

「って……そうだ、バイト!」

このままでは無断欠勤になってしまう、とはっとする。

に鞄と傘を元の世界に置いてきてしまったので、 だが焦って周囲を見回しても、連絡手段などあるはずもない。なにしろ、水たまりに落ちた拍子 私は本当に身ひとつでここへ来た状態

いと国王に言われたし、下手したらこのまま長期欠席で留年コースになったりして 入るはずもないのだから。 それに、たとえスマホなどがあったところで無用の長物だっただろう。ここは異世界で、 バイト先はもちろん、大学のことも考えると頭が痛い。 すぐには戻れな 電波が

あ、なんか、すごく現実逃避したくなってきた。

ひとり遠い目をしていると、扉を叩く音が響いた。

――ノアさんの声だ。

失礼致します」

「あっ、はい!」

長が百八十センチ以上ありそうだが、ヴァルターさんの方がより背が高いようだ。 美青年と黒髪の凛々しい美青年という麗しい組み合わせに、つい目を奪われてしまう。二人とも身 答えて扉の方を見ると、 入室してきた彼の後ろにはヴァルターさんの姿もあった。 銀髪の儚げな

私の姿を見て、ノアさんが穏やかに微笑む。

こちらの服もよく似合っておいでですね」 「お着替えも無事お済みのようで、ようございました。 ああ……元の世界のご衣装も素敵でしたが、

美な雰囲気が相まって、文官というより楽師や吟遊詩人のように見える。 さっきも感じたけれど、彼は物腰柔らかで話しやすい印象の人だ。裾の長い白地の服と本人の優さっきも感じたけれど、彼は物腰柔らかで話しやすい印象の人だ。裾の長い白地の服と本人の優

一方、ヴァルターさんは詰襟の黒い騎士服姿で腰に剣を佩いた、鋭く凛々しい印象。 やや近づきがたい雰囲気の彼は、私の前まで来るや、すっと脆いた。 にこりとも

任じられましたゆえ、 「御前を失礼致します。 これより御身をお守りさせて頂きます。 改めまして、我が名はヴァルター。光栄ながら陛下より貴女の護衛を 以後よしなに」

目の前で片膝をつかれると、睫毛が長く鼻筋が通った、男らしい美貌であることがよくわかる。

そして、低く落ち着いた声が耳に心地いい。

「は、はい。よろしくお願いします、ヴァルターさん」

- 寧な口調も、叶うならばご遠慮頂きたい」 「名をお呼び頂けて有難いが、俺のことはどうか呼び捨てでお呼びくださいますよう。 そのような

められると静かな気迫を感じるというか、気圧されてしまう。 意志の強そうな見た目同様、 はっきりものを言うタイプらしい。 整いすぎた顔も相まって、 見つ

¯わ、わかりました……いえ、わかったわ」

「ええ、どうかそのように」

そして立ち上がったヴァルターさん いや、 ヴァルタ は、 静かに私たちの脇に控える。

ノアさんはそんな彼に苦笑すると、私に向けて言った。

不遜な男で申し訳ございません。 もし失礼があればご遠慮なく仰ってください。 ただこのヴァル

31

32

「いえそんな、護衛してもらえるなんて本当に助かることですから。 さっきは色々教えてくださってありがとうございました」 

慌ててお礼を伝えれば、ノアさんは恐縮して首を横に振る。

「勿体なきお言葉にございます。それから私のことも、どうぞノアと。 我々にはどうか丁重な言葉遣いはお控えくださいませ」 陛下に対してならばまだし

「でも……」

**―寧な話し方なので抵抗があった。しかし、彼は困ったように微笑んで言う。** 初対面な上、年上の彼らにタメ口というのはやはりどうも落ち着かない。特にノアさんはとても

を頂いては、文官風情がなんと不遜なと、周囲に眉を顰められることでしょう。ですから、 お聞き入れくださいますよう」 "我々にとって、 聖女様は非常に尊き立場であらせられるのです。そのような方に身に余るお言葉 どうか

聖女はきっと、 色々と扱いが難しい存在なのだろう。

変に我を通して彼らを微妙な立場に立たせたくなかったので、 私はこくんと頷く。

「ええ。 「そういうことなら……遠慮なく呼ばせてもらうね。 ありがとうございます」 ノア、それにヴァルター。これでいいかな?」

できれば私のことも千早って呼んでほしいの。 なんだか落ち着かないから」 聖女様って呼ばれると慣れなくてむずむず

むしろ神々しい聖女を遠目に眺める、元気な町娘が妥当というか。 ほっとした様子の彼に、私もお願いする。自分は、どう考えても聖女なんて柄ではないのだ。

畏まりました。 それではこれより、チハヤ様とお呼び致しましょう」

微笑んで了承したノアが、表情を改めた。

として保護させて頂くにあたり、 **-では挨拶も済みましたところで、今後について少々ご説明を。チハヤ様をこれから聖女** 陛下よりいくつか仰せがございましたので」

「仰せ?」

係に任じられましたため、 ハヤ様の王宮生活を補佐し、この世界の知識を教授する者が必要とのことです。光栄にも私が教育 「ええ。ひとつ目は、 先程陛下が仰ったように、 明日からこの国の歴史などをお教えする形となります」 ヴァル ターを護衛につけること。ふたつ目は、 チ

「えっ、貴方が教育係になってくれるの?」

る日々になるのかなと思っていたから、意外だし嬉しい。 というか、生徒みたいに勉強できる時間があるのか。 もしかしたら、 一日中部屋に籠って予知す

い場所から慣れていかれるのが一番でしょうから」 「左様です。私は文官としても個人としても聖女の歴史を研究しておりますため、 お教えする場所は、ここから数部屋先にある書斎になります。 まずは、 適任と判断され

「書斎で授業するのね。よかった……色々教えてもらえるなら、 なんとか言葉は通じるようだけど、 この世界についての知識はほとんどないから、 すごく助かる」 これは本当に

ほっとした。 もし疑問が出てきた時も、 彼なら丁寧に教えてくれそうだ。

34

「それに先立ちまして、現時点でなにか疑問や、 お困りのことなどはございませんか?」

さっそく問われ、 私ははっとして身を乗り出す。

感じのことを言っていたけど」 私って、 やっぱり元の世界にすぐには戻れないのかな? さっき、 陛下がそんな

その方法以外で帰られた聖女様についての記載は一切ございませんでしたので」 「陛下が仰った通りです。 逆に申し上げれば、 それが現れない限りは元の世界にお戻りになれないはずです。 チハヤ様のお身体を包んでいた光。 あ の光が再び現れた時こそが帰還の

「じゃあつまり、 私を元の世界に戻す魔法みたいなものも、特にないってことなの

どうか違うと言って、と願いつつ尋ねたところ、ノアは申し訳なさそうに頷く。

あったとは聞いておりますが、 れるのでして」 「ええ。この世界に魔法と呼ばれるような超常的な力はございません。 今は伝承の中だけの存在です。それゆえ、 遥か昔にそうしたものが 聖女様の異能がより尊ば

「そうなんだ……」

薄々予想していたとはいえ、はっきり言葉にされるとやはり気落ちする。

だが、こうなってしまったものはもう仕方ない、と自分に言い聞かせた。

ない存在が原因みたいだし。そんな中で外に放り出されるでもなく、 だって話を聞く限り、私が異世界トリップしたのは彼らのせいではなく、 こうして王宮で保護してもら 天の意志のような見え

えるなら、 逆に有難いことだろう。

ここにいさせてもらえるなら安全だし、少なくとも衣食住の問題はなくなる。 もし人気のない荒れ地にトリップしていたら、今頃、寝る場所や食事の確保に焦っていたはずだ。

大学やバイトの件は考えると頭が痛くなるけれど、これについては早く戻れるよう願うしかない 絶対に帰れないわけではないみたいだし……それは御の字だ。

とか気持ちを切り替え、さらに尋ねる。

強く念じてみれば可能なのかもしれない。試しに、瞼を閉じてぐっと念じてみる。 をしていたらいいのかな。 「当面ここにいるほかないのは理解したわ。ただ……聖女として過ごすにしても、授業以外 もしかしたらできるのかも?とふと思う。さっきはまぐれでできた感じだったけれど、 予知するにしたって、好きな時にぱっとできるものかもわからないし」 んなに

なんでもいいから、 未来が視たい。映像よ、出てきて……

だがしばらく念じ続けても、 先程のような光景は視えてこなかった。

るものではないのだろう。 あの 時も意識的に視ようとしたわけでなく偶然の産物だったし、やはり己の意思で自由に視られ **瞼を開けた私は、がっくりと肩を落とす。** 

にいていいのかな? 「やっぱり、 いつでも好きに使えるわけじゃないみたい……あの、 なんだか大して役に立てない気がするんだけど」 こんな状況で、 聖女としてここ

ちょっと当てが外れた感じにならないだろうか。 聖女は異能で国に恩恵を与える存在なのだと国王が言っていた。それが目的で私を保護するなら

不安になり尋ねると、これまで黙って横に控えていたヴァルターが答えてくれる。

36

と心得ておりますので」 「それについては、どうかご心配なさらぬよう。 我々は貴女の力を、気まぐれな女神のようなもの

ら只人が思うがままに享受できるものではないと」 神のような存在。その異能による恩恵もまた、まれにこぼれ落ちる果実がごときもの。 「この世界には、 そういう言い伝えがあるのです。聖女はふいに現れてふいに去る、 気まぐれな女 ゆえに、

「へぇ……過剰に聖女へ期待していないというか、あまり欲がないの ね

ため、軟禁状態にしたりする可能性もあるのかも……と、 聖女という稀有な存在が現れたのだから、命じてどんどん能力を使わせたり、 ほっとする私に、ヴァルターが続ける。 ちらりと思ったが、 そうではないならひ それに専念させる

罰を下したのだと言われています」 「欲を出して聖女を地下牢に閉じこめ、能力を搾取しようとした王族も過去にはいたと聞いていま ただその途端、 たちまち国が傾いたとも。 己が愛し子である聖女を不当に害されたため、 天が

然に使われた時だけ、 それで聖女に異能を使うことを強制してはならないとしているわけ 恩恵を受け取るって認識というか」

さらに胸を撫で下ろしていると、ノアが静かに頷いた。

「そのような経緯もあり、 チハヤ様の行動を我々が必要以上に縛ることはございません。

をご覧になった場合は、 授業を受けて頂きますが、 私までお伝えください。すぐに陛下へご報告致しますので」 他の時間は好きにお過ごしくださいませ。日常の中でもし気になる予知

わかった」

年ぶりに現れた聖女様を、 「また、自由にお過ごし頂く中でも、出掛ける際はできる限りヴァルターをお連れください。 いつどのような輩が狙おうとするかもわかりませんので 数百

「やっぱり狙われる危険性があるんだ……了解、 気をつけるね」

れない。未来が視えるなら、たとえば賭け事の結果を予知してぼろ儲けしたりとか、 それだけ聖女は特殊な存在なのだろう。しかも私の力が予知能力なことも、 できるだけひとりにならないようにしよう、 と神妙に頷く。 懸念材料なの 悪事にも使え

ひとしきり会話が終わったところで、ノアがそっと切り出した。

下のもとへ報告に上がるよう仰せがございましたので」 「それでは恐れ入りますが、私はここで失礼させて頂きます。 チハヤ様へのご説明を終え次第、 陛

「色々とありがとう、ノア」

不便がございましたら、 「いいえ。チハヤ様こそお疲れでしょうから、本日はどうぞ自室でお寛ぎください。 お気軽にお申しつけくださいませ」 もしなにかご

微笑んでお礼を伝えると、穏やかな微笑が返ってくる。

そして彼は、 居間にヴァルターと二人きりになり、 一礼して退出していった。最後まで心遣いが細やかな人だなと思う。 これから警護してくれる彼に改めて挨拶しよう、

と向き直る。 でもやっぱり、ノアと話す時より緊張してしまう。

「あの、ヴァルター。初めは色々と迷惑をかけてしまうかもしれないけど、できるだけ早くこの世

界のことに慣れるようにするから。 これからどうぞよろしくね」

仰せのままに。 ただ初めに、 僭越ながら聖下にお願いしたいことが」

「ええ、なに?」

ちゃんと返事が返ってきたことにほっとしていると、 そして、 低い声が続きを紡ぐ。 凛々しい眼差しが真っ直ぐに私へ向けられ

愚かな行動を取られることがあれば、 「任じられた以上、護衛として鋭意努める所存です。 はっきりと苦言を申し上げさせて頂きます。それだけはご承 しかし、 下手に危険へ身を投じられるなど、

知置き願いたい」 「え……?」

誠を感じているわけではないということです。 「陛下のご命令がある以上、貴女にお仕えすることに異論はありませんが、驚いて目を見開けば、彼は流れるようにさらに続けた。 どうか、 こちらの手を必要以上に煩わせないで 貴女ご自身に敬意や忠

頂きたい」

引継ぎを済ませておく必要がありますゆえ」 「それでは、 本日はこれにて失礼致します。 明日より正式にお傍に侍る前に、 一度騎士団に連絡

そしてヴァルターは一礼するや、何事もなかったように部屋を出て行った。

残された私はぽかんとして立ち尽くす。

え……なに今の。

それを前もって牽制しておきたい気持ちは理解できる。 いや、彼の言葉は正論だと思う。私が考えなしの行動を取れば、 彼の負担に直結するだろうし。

加えて彼からすれば、 急に正体不明の女の護衛を命じられ、 色々と思うところもあるだろう。

あ

あして腹の内を初めに伝えておくことで、 お互い気持ちの行き違いも少なくなるだろうし。

けれど、あえて言わなくていいことまで、結構ずけずけ言われたような。

好きで聖女としてここに来たわけではないのだ。 わかっていたとはいえ、 愚か な行動を取るな、 面と向かって言われては、 はまだしも、特に貴女を尊敬しているわけじゃない、 さすがにいい気持ちはしない。私だって、 とか。 自分でも薄々 別に

それに今気づいたけど、 ということは、 私と馴れ合うつもりはないという意思表示なのだ、きっと。 名前で呼んでほしいとお願いしたのに、 あえて「聖下」と呼ばれた。

次第に、腹が立ってくる。初めは凛々しくて格好いい人だなと思ったけれど。 とっさに抱き留め

てくれた時は、 本当に感謝したけれど一

「あの人、なんか苦手な感じだわ……

気づけば私は拳を握り、 ぐぬぬと唸っていた。

異世界、 日目。 護衛騎士との顔合わせは、 こうして印象最悪で終わったのだった。

39

# 皮肉屋の騎士

夢見が悪かった私は、寝不足でうとうとしながら寝室で着替えていた。

に言われた言葉が頭から離れなかったのか、 急に変わった環境になかなか寝つけなかったせいもあるが、それだけではない。 夢の中で、 やけに危険な目に遭っていたからだ。 昨日ヴァル

廊下で蛇に遭遇してぎょっとしたり、さらには慌てて逃げた先で階段を踏み外し、 転がり落ちそ

うになったりと散々な内容だった。

「もう、まだなにもしてないのに、なんだってこんな間抜けな夢を……」

頭を抱えていると、着替えを手伝ってくれている侍女から声をかけられる。

「チハヤ様、いかがなさいましたか? もしやお加減がよろしくないのでは……」

ううん。そうじゃないの、 ちょっと夢見が悪かっただけで」

こんなことで心配はかけられないと慌てて答えれば、 彼女はほっと息を吐いた。

「それでしたら、よろしゅうございました」

-リーゼは、また黙って私の着替えに専念する。

楚々とした雰囲気で、 リーゼは昨日紹介された私付きの侍女で、結い上げた栗色の髪に紺色の侍女服が似合うお姉さん。 穏やかに細められた藍色の目からは優しそうな印象を受ける。

年齢はたぶん、私より少し上の二十五、六歳くらい。

侍女は数人いるが、基本的に彼女が私の身の周りの世話担当で、 他の侍女たちは彼女の補佐らし

今もリーゼがひとりてきぱきと私の衣装を整えてくれていた。

しとやかな所作なんてできない私では、いずれどこかにひっかけてしまいそうだ。 ちなみに今着せられているのは、昨日よりさらに優雅な衣装。ひらひらした長い裾で素敵だけど、

これは別の服に変えてもらった方が無難かも、とそっと提案してみる。

しない? 「あの、リーゼ。 すごく素敵な衣装だけど、できればもうちょっと飾りが少なくて動きやすい服に

よう、聖女様のご衣装にもそのうちにお慣れになるでしょうから」 「まさか、 貴女様にこのような粗末な格好をさせられるはずもございません。ご心配なさいません<sup>ぁなた</sup> ほら、貴女たちが着ているような服とか」

やんわりと断られ、やはり駄目かと内心でがっくりする。

でも、仕方ない気もした。 聖女に下手な格好をさせては王家の威信に関わるのだろうし。

それに、 分不相応で気が引けることを横に置けば、今着ている衣装はとても好みなのだ。

白地に淡い薔薇色と赤紫色が映える衣装で、袖や胸、 腰辺りは細く絞られているが、腰から下に

かけてのスカート部分はゆったりとしたラインを描いている。

色や目の色にしっくり合い、どこか凛とした雰囲気も感じさせる仕上がりになっている。 胸元や袖口には金糸で美しい刺繍が施され、それが優雅さを際立たせていた。私の赤茶に近い髪

姿見の前で息を漏らすと、私の髪に髪飾りを載せながら、リーゼが微笑する。

42

「それはよろしゅうございました。チハヤ様が初めに着ていらしたご衣装がこうしたお色味でした 恐らくお好きなのだろうと判断された陛下が、手配くださったのです」

「ああ……それでなのね」

してくれたのかと納得する。実際好きな色だったので、 そういえば私は、ここに来た時に赤紫色のカーディガンを羽織っていた。それを覚えていて用意 国王の配慮は素直に嬉しい

やがて身支度を整えて朝食も終えた頃、 ノアが部屋を訪れた。

昨日と同じ白い文官服を着た彼は、今日は重厚な表紙の本を何冊も持っている。

「おはようございます、チハヤ様」

さっそく来てくれたんだ」

じ思いの同僚たちからも、こうしてたくさん本を持たせられました」 「ええ。尊き聖女様に教示できる念願の機会のため、恥ずかしながら気が逸ってしまいまして。

はそれだけテンションが上がるものなのだろう。 そう言った彼は嬉しそうに微笑む。聖女の研究を続けてきた彼や同僚たちからすれば、

やかに微笑む様は清廉で、 寝不足の目には眩いなと目を瞬いていると、ノアがおや、 窓から差す朝陽に照らされ、昨日以上にノアの白皙の美貌が眩しい。 いっそ彼の方が聖人といった呼び名が相応しい気がしてくる というか、 長い銀髪でたお

と眉を上げた。

昨晩はよくお眠りになられませんでしたか?」

たり、階段から落ちたりした夢だったから、びっくりして飛び起きちゃった」 「実はそうなの。寝心地のいい寝台だったけど、 残念ながら少し夢見が悪くて。

実際、怖い夢を見て冷や汗をかかなければ、最高の寝心地だっただろう。 私用に与えられた天蓋

付きの寝台は、驚くほどふわふわな作りだったから。 苦笑して言った私に、ノアが顎に片手を当ててなにやら考える素振りを見せる。

もしかして……それは、 予知夢ではないでしょうか?」

「予知夢?」

あってもおかしくありません。その夢に、普段となにか違う部分はございませんでしたか?」 「ええ。チハヤ様の異能が予知ならば、 起きている間はもちろん、就寝時もそれが発動することが

「違う部分……言われてみれば、 確かにそんな感じだったかも!」

思い浮かべてはっとする。なにしろ今朝の夢はいつもより鮮明な上、 淡く光って見えたから。

蛇に遭遇した時の廊下の様子だって、今もはっきり思い出せる。

には鮮やかな空の絵が描かれており、空を悠々と飛ぶ鳥と木々や花も描かれていた。 初めて見る風景だった。石造りの瀟洒な廊下で床や柱が白い中、 ア ーチ状の天井

この光景が実際にあるかもしれないんだ。

確かめたい気持ちがむくむくと湧いてきて、身を乗り出す。

その下に木々や花が描かれている感じの」 ノア。王宮のどこかに、天井に空の絵が描かれた廊下ってあるのかな? 空を鳥が飛んで

「空の天井画ですか。 それでしたら、 離れの庭へ続く廊下かと」

44

「離れの庭?」

と鷹を飼育する禽舎もございます。その北西の一帯を、 や緑の回廊、 「ええ。この王宮は中央棟の中庭のほかに、 水を引いて作った水の前庭など様々あるのですが、 北側に広大な庭園がございまして。 我々は離れの庭と呼んでおります」 さらに奥まった北西には、 た北西には、薔薇園。そこには七つの泉

「へぇ……かなり広いのね。 慣れない人は道に迷いそう」

目を瞠った私に、 ノアが頷く。

恐らくチハヤ様が見たのは、その離れの庭に向かう途中の廊下かと存じます」 こへ通じているかわかるよう、行き先にまつわる絵が廊下の天井に描かれるようになった次第です。 仰る通り、過去の賓客の中には迷われる方もいらしたそうで。 そのため、廊下を進んだ先がど

「そっか……それであんな絵が描かれていたんだ」

に予知で視た白鷹もそこにいるかもと思うと、俄然見てみたくなったのだ。 となると、ますます信憑性が増してくる。そして鷹がいると聞き、 禽舎も気になってきた。 初

授業は午後からでも特に問題はございませんので」 確認をしてから授業を始めた方がよろしいかと存じます。 「あの、後でその廊下に行ってもいいかな? <br />
今朝の夢が本当に予知夢なのか確認したくて 「予知の検証ができれば今後の役にも立つでしょうから、 もちろん構いませんよ。むしろそちらの よろしければ、 今から行かれますか?

それならさっそく……」

弾んだ声を上げたところで、やんわりと釘を刺される。

「ただ必ず、ヴァルターを護衛にお連れください。 来ましたね」 あれも、 もうすぐこちらに到着するはずで……

黒い騎士服姿の彼は、私のもとまで歩み寄るとすっと一礼した。 ノアにつられて見ると、 ちょうど入室してきた、ヴァルターの姿。 相変わらず凛として隙のな い

「聖下、本日より鋭意護衛を努めさせて頂きます。 どうぞよろしくお願い致します」

「ヴァルター……え、ええ。よろしく」

が悪く受け取りすぎたのかもしれない。 かすかに緊張しつつ返す。昨日のことがあり、 それに、 やや苦手に感じる彼だけれど……い 一緒に過ごせば少しは距離が縮まるかも、 Þ あれは私

そしてノアから予知夢の話を聞いたヴァルターと共に、 私は部屋を出たのだった。

から、部屋を出て少し歩くと中央棟に入り、 建てで、昨日私がトリップした大広間や国王の居室など、 右に廊下で繋がれる形で西棟と東棟が建っているのだとか。 身支度の時リーゼに聞いた話によると、この王宮は三つの 煌びやかな光景が目に入ってきた。 重要な部屋があるのが中央棟で、 私の部屋は東棟二階の中央付近にある 大きな棟で構成され その左

「聖下、こちらです」

ヴァ 視界の先まで伸びた荘厳な廊下には数えきれない数の扉がずらりと並び、 ルターの案内で廊下を進んでいく中、 王宮内がとにかく広いことに驚かされた。 一体どれだけ部屋があ

るのだろう、と溜息が漏れてくる。 扉や傍の柱には凝った彫刻がされ てい て、 芸術品のような意匠に目を奪わ ħ

ている。恐らくこの辺りには、執務室などがあるのだろう。 天井画はさらに見事で、 筆や本を持って相談している官僚らしき人々の姿が重厚な筆致で描かれ

「すごい……。 まるで美術館の中を歩いている気分」

驚きの展開に頭がいっぱいで目に入っていなかった。 昨日も、 大広間から自室へ向かう際にここを通ったはずだが、 あの時は日が暮れて暗か ?った上、

こうして見ると本当に綺麗。王宮自体がひとつの作品みたいだ

ほうっと見惚れていると、ヴァルターが説明してくれる。

「それに近い部分はあるでしょう。王宮内にある壁画や調度品は数百年の歴史を経たものも多く、

補修の度に職人がさらに手をかけ、美しさを維持していると聞きます」

「そっか、 下手に触らない方がよさそうね。壊したりしたら目も当てられないもの

「貴女の華奢な手で触れて壊れるほど脆い調度品はありませんから、ご心配なさらぬよう。 聖女のご利益がついたと喜ぶ者たちもおりましょう」

「ご利益か……なんだか私、お地蔵さんみたいだなぁ」

苦笑しつつ風景を眺めて歩いていくと、 途中、 侍従や侍女たちとすれ違った。

きっと、国王から王宮中の人々に、昨日の出来事を含めて伝達されたのだろう。 て私たちが通り過ぎるのを見送る姿からして、どうやらすでに私の立場は周知されているらしい

見るに、彼が誰かもわかっている様子だ。いや、 私にはいかにも恐縮しているような視線を、ヴァルターには憧憬の眼差しを向けているところを それだけ彼は以前から有名なのだと思う。

なにしろ国王は、 彼を国一番の騎士と呼んでいたから

後ろを歩くヴァルターを、 ちらりと見やる。

えすぎだったのかな。そう思っていると、 私の質問に丁寧に答える間も、 昨日は遠慮ない物言いだった彼だけれど、いざ護衛となると真摯にやってくれている感じだ。 周囲に油断なく目を配っている。……昨日のあれは、 彼からすっと視線を向けられた。 やっぱり考

「どうかなされましたか?」

してきたのかなと思って」 「あ、ううん。わかりやすく説明しながら護衛してくれるから、 これまでもそんな感じのお仕事を

もそも俺の本来の職務は戦地での戦いゆえ、そうした命が下されることはほぼなかったので」 「要人の警護をしたことは幾度かありますが、大体は数日間で頻度も多くはありませんでした。 じゃあ、 貴方にとってこれが一番長い護衛になるかもしれないのね」 そ

だとしたら、 というか、 いつ帰れるか不明な以上、ヴァルターもいつまで私の護衛をすることになるかわからない ますます彼と上手くやっていかないとまずいだろう。 ずっと傍にいる人とよそよそしい空気のままなのは嫌だから、 少しでも場を和ませた

い。そう思った私は、努めて明るい口調で声をかける。

48

ない機会なわけだし。お互い、できる限り楽しく過ごしていこうね! 「ええと、どれだけ長い期間になるかはわからないけど、ここみたいな王宮にいられるのも滅多に ヴァルター」

だが、彼の眉がぴくりと動く。

\_\_\_楽しく?」

を楽しみながら、過ごせたらなぁと思って」 ゔ゙ うん。せっかく縁あって一緒に過ごすことになったわけだし……普段とはちょっと違う生活

彼の反応に慄いて言うと、硬い声が返ってくる。

拝命したが、こうした無為で安穏とした時間を過ごしている暇があるなら、 「貴女には申し訳ないが、楽しい気分でなどいられるはずがありません。陛下の命であるからこそ 俺は……」

そこで彼は口を噤み、それ以上は言うまいとばかりに、ふいと視線を逸らした。

「無為で安穏とした時間って……」

と、ぐっと反論を呑みこんだ。 そこまではっきり言う? と私は驚く。 ただ、 ここで言い返してはさらに場が険悪になるだけだ

もらえて本当に助かるわ。 「その……貴方にとってはあまり快い時間ではないのかもしれないけど、 初めて見るものばかりだったのに、 お陰で徐々にわかってきた感じ」 こうして色々説明して

ぎこちなく微笑んで言えば、返ってきたのはやはり遠慮のない台詞。

「お役に立てたのならば光栄です。とはいえ、これ以上はどうかふらふらなされませんよう。

子守りを命じられた覚えはありませんので」 内が珍しいのはわかりますが、先程から貴女は危なっかしい。 俺は聖女の護衛は任じられましたが、

子守りって、さすがにそこまできょろきょろしてないのに……というかこれって、 皮肉よね? もしかしなく

手を煩わせるな、 考えてみれば、 貴女を尊敬しているわけじゃないとか。あげくに、
ぁぁҳҳҳ 昨日からずけずけ言われ続けているような。 愚かな真似はするなとか、 小さな子供扱いって。

気で大人しい性格などではないのだ。 のまま泣き寝入りする性分でもない。気づけば、 「子守りか……そうね、それは私も同感だわ。だって私も、護衛騎士をつけてもらった覚えはあっ さすがに、堪忍袋の緒がぶちっと切れた。できるだけ波風立てまいとしたけど、そもそも私は内 理不尽なことを何度も言われれば普通にむかっとくるし、 ぐっと彼を見上げて言い返していた。

「小姑?」

ても、小姑をつけてもらった覚えはないもの」

ヴァルターの目が不穏に光った気がしたが、私は気にせず頷く。

千匹くらい厄介とも言われているわ。貴方を見ると確かにそうみたいね」 「私のいた世界では、嫌味を言う人をそう例えるの。古い言い回しでは、 小姑ひとりで鬼

生まれ立ての小鹿のように立ち尽くすばかりでおられたが、今はまるで口から先に生まれた小夜啼ょ 「……なるほど。これは思っていたよりも、 軽やかに言葉を紡がれる」 はっきりとものを仰る方だ。ここにいらした時は、

の次は小鹿に鳥って、よく流れるように皮肉が言えるなぁ。

50

さらりと返した彼に、呆れ半分感心半分な気分ながら、 私はさらに受けて立つ。

「確かに、ご祖父殿の仰ったことは一理ある。そして孫娘殿をとても逞しくお育てになられたよういすぎは駄目だけど、時にはそうしないと、相手はきっと気づかないからって」 祖父からも言われたの。 誰かさんがはっきり言ってくれるから、これくらいでちょうどいいんじゃない? なにか嫌なことを言われたら同じくらい言い返してやれって。 もちろん言 前に

を見つけたような爛々とした眼差しで、私は内心たじたじになる。 薄く微笑んでいるが、ヴァルターの目は少しも笑っていない。 というか、 まるで野生の獣が獲物

こ、怖い。美形に睨まれると圧が、圧がすごい……!

だが負けてたまるかと、ぐっと彼を見上げてにっこりと微笑み返した。

界。たとえ虚勢だとしても、ほんの少しでも強い自分でありたかった。 された時だって、 だって、言われっぱなしなんて性に合わないし、 こうして立ち向かってきたんだ。さらに言えば、ここは家族も友人もいない異世 小学校時代、両親がいないことで男子に馬鹿に

「おじいちゃんのこと、褒めてくれてありがとう。改めてよろしくね、 か弱く儚げでいらっしゃる、聖女殿」 口数の少ない護衛さん

向かい合う彼との間に一瞬、ばちっと火花が散った気がした。にっこり笑って皮肉を言えば、すぐに微笑と反撃が返ってくる

去ったのだった。 そんな私たちの様子に、 通りがかりの侍女たちは怯えた様子で肩を寄せ合い、 そそくさと立ち

ように見えたに違いない。 もちろん声を潜めて周りに聞こえないようにしていたので、傍からはきっと普通の会話をしている こうして互いを気に食わない相手認定した私たちは、 実際は、不穏な雰囲気だったんだけど。 時折口喧嘩をしつつ、さらに歩き続けた。

アルターとの応酬も自然なものになっていた。 -央棟の階段を一階に下り、そこから西棟の方へ廊下を進んでいく。 十分ほど経った頃には、 ゖ゚

彼は息をするみたいに皮肉を言うけれど、本気でこちらを傷つける言葉は決して口にしなかっ 私も軽い口喧嘩で収まる範囲で言い返していたからかもしれない この世界に来てからは、聖女だからと私を丁重に扱う人々ばかりで、

意見を言う人は他にいなかったため、ほっとした部分もあるというか。 だからほんの少しだけ、 遠慮ない応酬を楽しく感じる瞬間もあったり

ぶんぶんと首を横に振っていると、ヴァルターが足を止めて声をかけてきた。 ……って、いやいや、さすがにそれは錯覚でしょう! なにちょっと慣れかけてるの、

挙動不審な動きに没頭されている中を恐れ入りますが、 離れの庭へ続く廊下になります」 着きました。 ここが空の天井画の

「えつ、 もう着いたの? やっぱりそう: 夢で見たのってここだわ

#### 立ち読みサンプルはここまで

西棟の奥まった場所にあるその廊下は白い柱と床で、アーチ状の天井に鮮やかな絵が描かれてい 目に入ってきた風景に、馴染んできた皮肉を受け流して目を見開く。

場所はここで間違いないらしい。 見るほどに夢で見た光景とぴったり一致する。やはり私が視たのは予知夢であり、 それが示す

陰で事前に心構えができるわけだしー ということは、 私は今後ここで蛇に遭遇することになるのか……。そう思うと少し怖いけど、 よし、前向きに考えておくことにしよう。

ただ、こんな綺麗な場所に蛇が現れるなんて、 なんだか不思議な気分になる。

どこかで飼っているなら別だけど――

「ねえ、ヴァルター。王宮内では鷹以外に蛇も飼ってたりするの?」

振り向いて尋ねれば、あっさりと首を横に振られた。

すぐに駆逐されるはず。牙や毒を持つ存在を、陛下のお傍に近づけるはずもありませんから」 飼うことはありません。特に蛇のような危険な生物は、 「いいえ。陛下のご趣味が鷹狩りであるゆえ禽舎はありますが、 飼育はおろか、 基本的に王宮内で馬以外の動物を いるのを発見された時点で

「そうよね……。じゃあ、なんでこんなところにいたんだろう」

ぽつりとこぼすと、ヴァルターが廊下の先にある扉を視線で示した。

たように薔薇園などがあり、緑に溢れている。庭師が日々雑草や害獣を駆除したとしても、 小さな蛇が紛れこみ、 「もし考えられるとすれば、 育つこともあるでしょうから」 あの扉から偶然入ってきたのでしょう。 あの先には、 先程もお話しし まれに

「それで扉が開いた時、たまたま蛇が入りこんだってわけね。 うんうんと納得した私だが、ヴァルターはなにか気になった様子で尋ねてくる。 確かにその可能性は高そう」

「ちなみに、ご覧になったのはどのような蛇でしたか?」

「ええと……確か、黒と橙の斑模様の蛇。派手な色合いだったから、 よく覚えてる」

すると、ヴァルターが目をすっと細めた。

「――それは恐らく、毒蛇です」

「 え ? \_

驚いて見つめ返したところ、彼は真剣な眼差しで続けた。

つ希少な種類の毒蛇です」 から。だが貴女が仰った蛇は、森の奥の繁みをあえて探さなければ捕らえられないような、から。だが貴女が仰った蛇は、森の奥の繁みをあえて探さなければ捕らえられないような、 「もし離れの庭に蛇がいたとしても、 無害な青蛇でしょう。 この辺りに生息する種類は限られます 危険か

「……つまり、誰かが故意に王宮内に毒蛇を入れたってこと?」

跡があるはず。なのに、真っ白で綺麗な状態だった。 すとなんだか不自然な気がした。泥ひとつない床の上で、 もしそれが自ら外から来たのだとすれば、 偶然入りこんだ動物に遭遇しただけだと思っていたのに。でも確かに、改めて今朝の夢を思い返 床には多少なりとも泥や砂が落ちていて、 蛇がとぐろを巻いていたのだから。 蛇行した形

れていた。 私が階段から落ちた場面も、どこかおかしかった気がする。 まるで床に滑りやすくするものが塗られていたような 夢の中の私は不自然に床に足を取ら